

ロシア聖書協会と聖書ロシア語訳事業

—歴史的 position 付けについての覚え書き—

兎 内 勇津流

はじめに

聖書は、キリスト教の正典として、その各宗派で使用されていることは、いまさら改めて述べる必要のないことかもしれない。

聖書は旧約聖書と新約聖書という二つの部分から成るが、旧約聖書の原典はヘブライ語で書かれており、新約聖書の原典はギリシャ語で書かれた。しかし、周知のように、ローマカトリック教会においてはウルガタと呼ばれるラテン語訳聖書が伝統的に標準テキストとして採用され、典礼はラテン語で行われるのが長く原則とされてきた。

ギリシャ正教会においては、新約、旧約ともギリシャ語の聖書が使われ、典礼はギリシャ語で行われるのが原則であった。しかし、スラブ人への布教に際しては、9世紀半ば過ぎにキュリロスとメトディオスによって、当時の南スラブの言語をふまえた上で、専用の文字^①によって表記される、ギリシャ語の構造を模した人工的文章語が考案され、典礼書や聖書の一部がこれに翻訳され、スラブ語典礼が導入された。こうして生まれた古代教会スラブ語は、この後しばらくスラブ人のあいだの共通文語として機能し、以後のスラブ文字文化が発展する上で共通の土台となった。

キリスト教受容以後のキエフ・ルーシの教会においても典礼は教会スラブ語によって行われ、それはロシア教会の伝統として引き継がれた。

ここで触れておきたいのは、聖書に含まれる文書全体の翻訳がロシアの教会において完成したのは、1499年のゲンナージー聖書においてであるということである。この聖書の成立には、ローマ・カトリック教会の影響が大きく、例えば旧約聖書に含まれるが七〇人訳聖書に含まれない文書については、これをウルガタから訳して収めているという^②。ロシア正教会において、この時点まで聖書全体の訳がなかったということは、ある面では、ロシアにおける聖書学の未発達を示すと言えるが、むしろ、キリスト教信仰のあり方において聖書の持つ意味の相違に由来すると言うのが適切のように思われる。すなわち、教会は信徒の集団を組織し救済への道へと導くために営まれるものであろうが、その中での正典としての聖書の地位

-
- 1 キュリロスとメトディオスが当初考案した文字はグラゴール文字であるが、その後、ギリシャ文字に近い字体を持つキリル文字が考案され普及した。
 - 2 旧約聖書の原典はヘブライ語で書かれているが、正教会においては伝統的にギリシャ語訳である七十人訳聖書(セプトゥアギンタ)が標準テキストとして使用されていた。*Рижский М.И. История переводов библии в России. Новосибирск: Наука, Сибирское отд-ние, 1978. С. 57-59.*

はアプリアリに存在したものでなく、歴史的な事情において築かれたものである。またその後、聖書が正典として位置づけられた以後においても、ローマ・カトリック教会においてもギリシャ正教会においても、個々の信徒が聖書を読んで解釈することは求められてはいなかった³⁾。こうした状況がおおきく変貌したのは、エラスムスに代表される、西欧における人文主義の展開と、それに引き続く宗教改革によるところが大きい。すなわち、原典による聖書研究の立場からエラスムスはギリシャ語版新約聖書を校訂・刊行した。また、ルターはカトリック教会の権威を否定して、聖書に基づいた信仰を唱え、プロテスタント信仰の大きなうねりを生み出すと同時に、聖書のドイツ語訳を行った。以後、ヨーロッパ各国で相次いで聖書の翻訳が行われ、印刷術の普及によって、聖書は格段に多くの人の手に渡りやすくなったのである。

教会として独自の伝統を保持してきたロシア正教会も、最終的にはこうした動きと無縁ではいらなかった。ゲンナージー聖書の成立、1550年代のモスクワにおける書籍印刷の創始、イワン・フォードロフによる印刷事業、特にオストローク聖書の製作(1581年)、ピョートル・モギラによるキエフ神学校の開設(1631年)へと展開したその後の歴史は、ロシア正教会が、その知的な営みにおいて、西欧と深く関わっていかざるを得なかったことを示すように思われる。

ロシアにおける聖書のロシア語訳事業は、ロシア聖書協会⁴⁾の活動に始まるといってよいが、これもその例外ではない。

ロシア聖書協会は、英国外国聖書協会の支部として、1813年に設立された。アレクサンドル一世の友人であり、1803年以来宗務院長の職にあったA.H.ゴリーツィン公(1773-1844)を総裁とし、アレクサンドル一世の支持のもとに運営されたこの協会は、その後短期間で急速な発展を遂げ、教会スラブ語訳聖書、その他ロシア帝国内外諸民族向けの聖書を大量に製作・頒布したが、ロシア語訳聖書の製作と頒布は、その事業の中心的部分であった。しかし、その後、1824年になってゴリーツィン公は聖書協会の総裁と教育相の両ポストを辞し、後任の総裁にはサンクト・ペテルブルク府主教セラフィーム(1763-1843)が、教育相にはA.C.シシコフ提督(1754-1841)が任じらる。この時以後、協会は実質上活動停止状態となり、ニコライ一世の治世になってまもなく、1826年に解散された。協会は、新約聖書のロシア語訳を完成させたが、旧約聖書の大部分は未完に終わった⁵⁾。そればかりか、その出版したロシア語訳聖書は禁書とされ、聖書のロシア語訳は、アレクサンドル二世(在位1855-1881)即位後の大改革期に至るまでタブーとされたのである⁶⁾。

3 聖書がどのように成立・正典化されたか、キリスト教において聖書がどういう位置を占めるかについては、田川健三『書物としての新約聖書』勁草書房、1996年、特にその第1章、加藤隆『新訳聖書はなぜギリシャ語で書かれたか』大修館書店、1999、および同著『一神教の誕生：ユダヤ教からキリスト教へ』（講談社現代新書；1609）講談社、2002、特にその第6章を参照。

4 1814年9月に改称されるまでは、正式にはサンクト・ペテルブルク聖書協会であったが、本稿においては便宜上、一貫してロシア聖書協会と呼ぶことにする。

5 かつてJeffrey Brooksは、ロシア語版聖書は1860年代-1870年代になるまで普及しなかったと述べたが、普及しなかったというより、ロシア聖書協会の解散以後は未完のまま、翻訳・出版とも禁止されていたのである。Jeffrey Brooks, *When Russia Learned to Read* (Princeton: Princeton U.P., 1985), p. 24.

6 この後、聖書のロシア語訳を行ったため、弾圧された例については次を参照。Рижский. История переводов библии в России. С. 140-155.

その後結局1860年代になって、宗務院自身の手によってロシア語訳が進められることとなり、1876年に完成を見た。これがいわゆる「宗務院版」であり、その後、多少の改訂はあるが、現行ロシア語訳聖書の骨格はここにある⁷⁾。

本稿においては、この中で、ロシア聖書協会の活動に焦点をあて、聖書をロシア語訳するという協会の事業の意味を考えたい。

ここで特に注目したいのは、当時の言語的状況との関係である。ロシア語が文章語として一定のスタイルをほぼ確立していた19世紀後半とは異なり、18世紀末から19世紀初頭においては、知識人の間でロシア語の文体をめぐる論争が行われ、ロシア語は文章語として確立する途上にあっただと思われる。しかし、従来の研究においては、教会スラブ語は古風にすぎて理解できる人が少なくなってきたので、聖書普及のためには、広く理解されるために、ロシア語訳が必要であったというように論じられてきた。しかし、この前提は、ロシア語が普及し教育が普及したより後の時代についてあてはまるとしても、19世紀初めの状況に即したもののか、疑問がある。

本稿においては、はじめに、従来の研究により、ロシア聖書協会の事業の経過を整理する。ここで主に依拠するのは、革命前の業績であるA.H. ピーピンの『アレクサンドル一世時代の宗教運動』⁸⁾、J.C. ザチェックの学位論文『ロシア聖書協会, 1812-1826』⁹⁾およびM.И. リジュスキー『ロシアにおける聖書翻訳の歴史』¹⁰⁾である。次いで、当時のロシア語をめぐる状況について、とりあえずЮ. ロートマンとБ. ウスペンスキーの共著論文『ロシア文化の事実としての19世紀初めの言語をめぐる論争』¹¹⁾に依りながら、言語的状況を整理する。この論文は、ロシア語の文体をめぐり、A.C. シシコフを先頭とする教会スラブ語擁護派とH.M. カラムジン (1766-1826) を先頭とするロシア語派との論争が展開され、その総合という形でA.C. プーシキン (1799-1837) によって新しい文章語が確立されるに至った、その論理的展開を分析するものである。

最後に、以上を踏まえた上で、聖書のロシア語訳事業が当時のロシア社会に及ぼした意味について考えることとしたい。

7 最近の聖書ロシア語訳の動向については、加藤栄一「ロシアにおける聖書翻訳と聖書学受容の現状」『ロシア語ロシア文学研究』33号、2001年、97-102頁。また、19世紀以来現代に至る新約聖書のロシア語訳に関する先行研究として、宮崎武敏「ロシア語訳新訳聖書の系譜」『ロシア語ロシア文学研究』16号、1984年、85-94頁がある。

8 *Пыпин А.Н. Религиозные движения при Александре I.* СПб.: Академический проект, 2000. なお、1860年代後半から1870年代にかけて「Вестник Европы」に連載されたものが初出である。

9 Judith Cohen Zacek, "The Russian Bible Society, 1812-1826" Ph.D. dissertation (Columbia University, 1964).

10 *Рижский. История переводов библии в России.* なお、栗生沢猛夫「ロシア語訳聖書の歴史」『えうゐ』8号、1980年、37-47頁は、これに依拠している。

11 *Лотман Ю.М. Успенский Б.А. Споры о языке в начале XIX как факт русской культуры // Лотман Ю.М. История и типология русской культуры.* СПб.: Искусство—СПб, 2002. なお、この論文の初出は、Ученые записки Тартуского университета. Вып. 358. Труды по русской и славянской филологии. Т. 24. 1975.

1. ロシア聖書協会の成立と、聖書のロシア語訳事業

ロシア聖書協会は、英国外国聖書協会の支部として、1813年に設立された。

英国外国聖書協会は、聖書の普及を目的として1804年にロンドンで設立された。短期間にその活動は世界的な規模にまで発展し、1817年までに1500万部の聖書を18の言語で発行したという。現代の聖書の普及はこの団体の活動によるところが大きく、日本聖書協会も、この団体の影響下に作られた3つの組織が統合されて出来たものである⁽¹²⁾。

ロシア聖書協会は、1812年12月6日に、アレクサンドル一世が宗教問題を担当するゴリーツィン公の報告およびそれに付随するペテルブルクに聖書協会を設立する案を裁可して誕生した。

その規約第1条は、会の目的を次のように述べる。

「本協会の唯一の目的は、全く註や解説を付さない形での聖書が、より多くの人々に利用されるようにすることを援助することにある。」⁽¹³⁾

これは、英国外国聖書協会の方針に由来する。

英国外国聖書協会の聖書普及活動のバックボーンはプロテスタント的なものであるが、協会はそれを表面に出さず、聖書をはじめとするその出版物は、カトリックその他を含む全キリスト教徒が使用できることを目指している。このため、協会の出版する聖書には、一切の注解を付さないという編集方針がある。聖書は、たいへん複雑な過程を経て編まれた文書群であり、しかも非常に古い時代に、ヨーロッパ人にとってもロシア人にとっても風土や歴史的状況が大きく異なる土地において編まれたことを考えると、それを読み進めるためには何らかの注解が必要な筈であるが、注解を付すとそこに宗派色が出るのが避けられないため、このような方針が採られているのである⁽¹⁴⁾。

規約の第2条は、次のようなものである。

「協会は、自己の内的確信に基づき、あらゆる身分の人々、とりわけ国内の貧しい人々に聖書を普及させることに益する事業に参加したいと望む、全ての宗派の人々によって構成される。」

さらに当初の案においては、その規約第3条は、ロシア人に対する聖書頒布を担当官署の役割であるとして協会の活動対象から除外し、協会の活動対象を外国人および異宗派人に限定していた。しかし採択時には、こうした限定はとりはられ、アジア地域を含めたロシア帝国内の様々な民族に、その民族語による聖書を頒布すると規定された⁽¹⁵⁾。

この他、規約は、役員構成などの執行部体制、総会などについて規定する。なお、総会は最低年に1度開催し、会計報告や役員改選を行うこととされ、役員は無報酬とされている。

以上の規約がアレクサンドル一世によって裁可された後、創立大会は、翌1813年1月にゴリーツィン公の邸宅で開かれた。大会においては、上記の報告および規約が朗読された

12 田川健三『書物としての新約聖書』、494-497頁。

13 *Пытин. Религиозные движения. С. 42.*

14 田川健三『書物としての新約聖書』、501-507頁。

15 *Пытин. Религиозные движения. С. 43.*

後、次の役員が選出された。

総裁：A.H.ゴリーツィン公

副総裁：B.П.コチュベイ伯、A.K.ラズモフスキー伯、M.И.ドナウロフ、P.A.コシェレフ、O.П.コゾダヴレフ、K.И.ガブリッツ

書記：B.M.ポポフ、A.И.トゥルゲーネフ

会計：Я.И.シュミット

このうち、総裁と書記の2人は、創立から1824年まで継続してその任にあたることになるが、この2人の書記はゴリーツィン公の配下の者であった⁽¹⁶⁾。

この他選出された10人の理事の名は列挙しないが、後に教育相を務めることになるセルゲイ・ウヴァーロフ（1786-1855）が含まれていることが目に付く。

この構成から見ると、幹部にはツァーリに親しい高級貴族が名を連ねていて、聖職者の姿も民間人の姿もなく、政府主導の色彩が明瞭に表れている⁽¹⁷⁾。

こうして選出された理事会は、最初の会合において、その事業として第1に、宗務院の発行する教会スラブ語訳聖書を入手しやすくすること、第2に、他宗派のキリスト教徒であるドイツ人、ポーランド人、フィン人、スウェーデン人、ラトビア人、ギリシャ人等のために聖書を刊行すること、第3に、貧困に苦しむ人々に聖書を提供すること（ナポレオン戦争において被害を受けたり捕虜となった等により苦境に陥った人々もここに含まれる）、第4に、ロシア国内のイスラム教徒や異教徒たちに聖書を頒布することに取り組むこととした。

こうした事業のために必要な資金は、英国からの送金の他、会員を募り、会費と寄付に拠ってまかなうこととなったが、会員を募集すると多くの賛同者があり、各地に次々に支部ができるなど、協会の事業は順調な滑り出しを見せた⁽¹⁸⁾。

協会は、その創立直後から、精力的に出版活動を展開した。フィンランドの聖書協会と協同でフィン語訳を刊行したほか、ドイツ語版、アルメニア語版を次々と出版し、さらには、ロシア聖書協会設立以前から進められていた事業であるカルムイク・蒙古語訳の出版に取り組み、さらにポーランド語訳、およびフランス語訳の出版にも取り組むこととなった⁽¹⁹⁾。

さらに協会はその後ロシア人への聖書の頒布について、当初の宗務院版を買い上げて頒布する方針を改め、自前で出版することとした。理由は、宗務院版は4-5分冊から成るため高価であり、組み方を細かくして自前で出版する方が安価にできるためという⁽²⁰⁾。

しかし、この後、1816年になって協会はさらに方針を改め、宗務院のテキストに拠る教会スラブ語訳聖書を自前で出版するだけでなく、独自に聖書のロシア語訳を行い、それを出版することとした。

16 *Пытин*. Религиозные движения. С. 51.

17 *Пытин*. Религиозные движения. С. 45. なお、このアレクサンドル・イヴァノヴィチ・トゥルゲーネフ（1785-1846）は、デカбриストであるニコライ・イヴァノヴィチ・トゥルゲーネフ（1789-1871）の兄にあたる。

18 *Пытин*. Религиозные движения. С. 46-47.

19 ポーランドにおいてはカトリック勢力が強いため、ラテン語使用の傾向が強く、また一般信徒が聖書を読むことが奨励されなかったため、ポーランド語聖書の普及度が高くなかったことが背景にあると思われる。フランス語については、ロシアの上流階級のために必要とされたのであろう。

20 *Пытин*. Религиозные движения. С. 48-49. 教会スラブ語訳を自前で出す理由には、宗務院への言い訳が感じられる。

プイピンによると、ロシア語訳聖書の出版という考えは、協会の設立当初から存在したが、それを公然と表明することは出来なかった。その判断はアレクサンドル一世自身の指示によるものであると、協会の年次報告に基いて次のように述べる。

1815年末に皇帝が首都にお帰りになると、協会の総裁は、理事会の名で、協会が出版したさまざまな言語による聖書、および協会の出版した他の書物や報告書を皇帝のご覧に入れた。皇帝は、協会の活動について満足の意を表し、次いで、「自分自身の心境の動きによる」こととして、総裁に対し、衷心から希望する次のような提案を、宗務院に対して行うようにと命じた。「ロシア人にとって最もわかりやすいスラブ語 Славянского наречия として、自分の自然なロシアの言葉で на природном своем Российском языке 聖書を出版し、ロシア人に対して、神の言葉を読む手段を入手させること」を。総裁は、宗務院の院長を兼任しており、1816年2月28日に、宗務院に対して君主の考えと意志を、自分の賛成の言葉を添えて、然るべく提案した… (後略)⁽²¹⁾

宗務院は、これを受けて次のように決した。

神学校委員会に、ペテルブルク神学大学において翻訳者を選考することを委託し、そうして選ばれた人々に翻訳を委ねる。翻訳された原稿は、聖職者メンバーによる審査のために聖書協会に送られる。協会は、審査を通った翻訳を、教会スラブ語のテキスト付きで出版できる、と⁽²²⁾。

こうして、いよいよ聖書のロシア語訳事業は、開始されることになったのである。

1819年には、福音書が最初に完成して出版され、さらに1820年には福音書と使徒行伝の合本が出版され、1821年には新約聖書全体および詩篇がそれぞれ出版されるなど、事業は順調に進行した。また、少し後には、対訳版は高価かつ携帯に不便という理由により、ロシア語と教会スラブ語の対訳版以外に、ロシア語テキストだけの版が出版されるようになった⁽²³⁾。

全体として、ロシア聖書協会は、その決して長くない活動期間中に、教会スラブ語訳およびロシア語訳のほか、次の言語による聖書を出版した⁽²⁴⁾。

イディッシュ語、古代ギリシャ語、現代ギリシャ語、ドイツ語、フランス語、ポーランド語、エストニア語 (デルプト方言)、ラトビア語、グルジア語、アルメニア語、トルコ・アルメニア語、リトアニア語低地方言、フィン語、カレリア語、チェレミス語、チュヴァシ語、モルドヴァ語、モルダビア語、コミ語、ペルシャ語、カルムイク語、ブリヤート語、タタール・トルコ語、タタール語 (オレンブルク方言)、ユダヤ人タタール語⁽²⁵⁾。

協会は教会スラブ語訳、およびロシア語訳を含めると、全部で29の言語、129種の版の聖書を刊行し、総発行部数は67万5千部余に達した。また、外国からの購入により入手、頒

21 Пытин. Религиозные движения. С. 57.

22 Пытин. Религиозные движения. С. 57-58.

23 *Historical Catalog of the Printed Editions of Holy Scripture in the Library of the British and Foreign Bible Society* (London: The British and Foreign Bible Society, 1903-1911), v. 2, pp. 1800-1801. (今回はMaurizio Martino Publisherによるリプリント版を使用した) および Zacek, "The Russian Bible Society, 1812-1826", p. 87; Пытин. Религиозные движения. С. 81.

24 ここでは、聖書全体の場合と、その一部分の場合の両方を区別せずに数えている。

25 原語еврейско-татарский. クリミア半島に住むユダヤ人の話すトルコ系言語であろうか。ならば、クリムチャク語крымчакский языкということになりそうであるが、断定できないので仮にこう訳しておく。

布した分を加えると、その扱った聖書は41の言語に及び、総部数は70万5千部に近い。また、財政規模の面では、1813年から1822年までの10年間の協会の収入合計は、ペテルブルクだけで280万ルーブルを超えた²⁶⁾。支部は、モスクワ、リガ、キエフをはじめとして全国に広がり、最終的には300近くにまで達した。

しかし、こうして発展した事業は、突如として停止されることになる。

その転機となったのは、1824年5月にゴリーツィン公が協会の総裁および教育相の両方のポストを辞職したことであった。後任の総裁には、サンクト・ペテルブルク府主教セラフィームが、教育相にはA.C. シシコフが着任した。

ピピンは、上記2人が新しいポストに就任後の1824年11月4日に、アラクチュエーフとの3者で会見し、協会の事業の将来について議論したことを紹介している。シシコフには既に『ロシア語の古文体および新文体について Рассуждение о старом и новом слоге русского языка』(サンクト・ペテルブルク、1803年)などの著作があり、カラムジンに代表される新文体派に対立する、古文体擁護派の中心人物として知られていた。ピピンによると、この会談において議論の主導権を取ったのはシシコフである。シシコフは、協会がその活動状況を広報する『報知』を出し続けていることについてその即時停刊を求め、また、聖書のロシア語訳事業について、セラフィームが、多くの人は教会スラブ語を解しないとその一定の意義を認める発言をしたのに対して、「誰が教会の礼拝を解しないことがあるだろうか。誰が、祖国を離れていて、自分の言葉を忘れるだろうか。…(中略) 教会の言葉と民衆の言葉を隔てる意見にはたいした根拠がないなどと言わせておいてよいのだろうか。」と、強力に反論した。長い議論の末、この席では、聖書協会を廃止すること、聖書の口語訳 переводы св. писания на «простое наречие»すなわちロシア語訳を出版しないことなどにまとまったという²⁷⁾。

この方向転換の背景にあったのは、アレクサンドル一世自身の保守化に加え、聖書協会内で、フリーメーソンの流れを汲む神秘主義的な傾向のメンバーの活動が盛んであることや、プロテスタント諸派の活発化、さらに聖書のロシア語訳の進行という事態に、ロシア国家の一体性の拠り所を脅かし、宗教的分派や革命思想を呼び込むものとして、保守派が強い不快感を覚えたことなどが指摘されていて、ピピンによれば、それは結局アレクサンドル一世の動揺を利用した反啓蒙主義者たち(обскуранты)の陰謀に帰せられるのである。

しかし、こうしたことについて、本稿ではこれ以上踏み込むことをしない。

ただし、ここで踏まえておきたいことは、そもそも当時のロシア社会において、ロシア語訳聖書の必要性が公に議論されていたわけではないということである。ロシアにおける民間出版は、エカテリナ二世時代(在位1762-1796)のH.I. ノヴィコフ(1744-1818)に始まると言われるが、当時はまだそこから日が浅かった。体系的な法整備は途上にあり、専制君主制下にあったわけである。また、宗教関係出版物については、宗務院による検閲が行われ

26) Пыпин. Религиозные движения. С. 85-87.

27) Пыпин. Религиозные движения. С. 240-241. なお、シシコフがロシア語をこのように呼んでいたことに、彼の言語的意識が窺える。すなわち、彼はロシア語と教会スラブ語とを別個の言語としてでなく、一つの言語内での文体の違いと捉えていて、その中で口語 «простое наречие» は、神と語るに際して必要な莊重さを欠いていると考えているのである。

ていた。こうした当時の状況において、そもそもツァーリの意志によるとされたものについては、賛成するにせよ反対するにせよ、公に議論出来ることではなかったであろう。ロシア聖書協会は、君主の意志によって生まれ、君主の意向によってその命を終えることとなったのは、その帰結であると言える⁽²⁸⁾。

その後多少の曲折を経た後、ニコライ一世の治世になってまもなく、1826年7月に協会は正式に廃止された⁽²⁹⁾。

以上、非常に駆け足でロシア聖書協会の活動を概観したが、19世紀の初めにおいて、聖書のロシア語訳を行い、未完結に終わったとは言え、数万部単位で国内に頒布したことの意味は大であったことは疑いない。しかし、それは単純に、ロシアの民衆に聖書を広めるには、教会スラブ語よりロシア語が適っていたということなのであろうか。

次に、当時のロシア語の状況についてみることにしたい。

2. 19世紀初頭におけるロシア語をめぐる状況

18世紀から19世紀初頭にかけてのロシア語の歴史は、単純なものではなかった。それは、教会スラブ語（церковнославянский язык）および官庁事務用言語（приказно-деловой язык）という二つの書きことばを持っていたロシアが、西欧文明の影響下に、独自のネイションとしてその近代的文章語を作り出す過程として見る事が出来るように思われる。そういう観点で見ると、文書語史の問題は、単に自然的変化のプロセスというより、むしろすぐれて政治的な問題だったと言えるだろう。

教会スラブ語は、9世紀後半に遡る書き言葉としての伝統を有していたわけであるが、長い年月を経る間に、当然のことながら使用される各地域の言語的特徴に影響されて、変化を続けていた。その後18世紀になって、ロシアは西欧文明を吸収することに迫られ、さらにはロシアもまた西欧と同等に文明的存在であることを示すため、教会スラブ語とは別個の言語として、西欧語の対応物としてロシア語を創り上げる必要が生じた。

ロートマンとウスペンスキーの共著論文は、18世紀のロシア語に生じた変革について、次のように述べている。

「比較的短期間に、文章語（литературный язык）の性格を根本的に変える変革が起こり、それによって文章語は、話し言葉（разговорная речь）と書き言葉（книжная речь）を明確に対置する言語から、話し言葉の共通語（разговорное койне）への方向性が強く、かつ発展の過程でその話し言葉の共通語に従属する言語へと、根本的に性格を変えた。カラムジンのことばをもじって言うならば、ロシアの文章語は、（理想的状態において）人々が書くように話す必要のある言語から、人々が話すように書くべき言語になったのである（いうまでもなく、この際標準となるのは、社会の一定層の言葉である）」（括弧内は原文にあり）⁽³⁰⁾

28 聖書翻訳問題について雑誌などである程度公に議論できるようになるのは、大改革期のことと思われる。これは即ち、宗務院が自らの事業として聖書のロシア語訳に着手した時代であり、フィピンが、ここで利用した研究『アレクサンドル一世時代の宗教運動』を著した時代でもある。

29 Пытин. Религиозные движения. С. 271.

30 Лотман, Успенский. Споры о языке в начале XIX. С. 480.

以下は、同論文から、関連する部分の内容を筆者なりに要約したものである。

18世紀のロシアの言語状況に存在したのは、教会スラブ語とロシア語の文体使い分け状態（ロートマンとウスペンスキーはこれをディグロシア（диглоссия）とよぶ）であった。この状態において、2つの言語体系には価値上の上下を伴い、かつ、両者は別個の言語としてではなく、一つの言語中での文体の区別として認識された上で、高雅な文体である教会スラブ語だけが本来の意味における文章語として認知され、日常語は、それからの逸脱とみなされる。

この文体使い分け状態は「普通の」ロシア語を正当化し、教会スラブ語の使用範囲を限定することにより、教会スラブ語とロシア語の二言語併用（двуязычие）へと移行したが、これは過渡的な状態である³¹。

こうした変化の過程は、西欧の影響と密接に結びついていた。

教会スラブ語にはない、ロシア文章語固有の規範は、西欧語作品を翻訳する過程で形成された。ロシア語を西欧語と同じタイプの文章語として形成する上で、翻訳はその手段となったのである。この過程において、西欧語から借用された語句は、文語的な色彩を帯びることとなった。たとえば、влачить жалкое существование（←traîner une misérable existence）、питать надежду（←pourrir l'espoire）などがそれである。他者性を帯びるもの（чужое）は、文語的なもの（книжное）として機能したのである。

こういう状態において、あらゆる他者的なものは、文語的なもの、正しいものと捉えられ、言語の使い手は、正しいテキストを作ろうとする際、自分の持っている言語的習慣を離れることになる。西欧語からの翻訳借用語（калька）は、教会スラブ語由来の語彙と文体的機能において等価の、高雅な文体と関連づけられる。こうして、翻訳借用語は、教会スラブ語的形態で現れることとなる。これは、たとえば（млекопитающее）のような学術用語に顕著である。カラムジンがドイツ語の Gesetzkunde から законоведение を造語し、C.C. ポプロフ（1763-1810）が西欧語調の горизонт にかえて кругозор（← Gesichtskreis もしくは Rundschau）を使用したのもこれにあたる。こうして、文章語において教会スラブ語的要素が活発化することになった。また、その一方では、教会スラブ語的語彙が、ロシア語の中で、西欧語の影響によってその語義を変化させることが生じた。翻訳ものに使われた教会スラブ語からの古風な新造語は、西欧ものの翻訳だけでなくロシア人のオリジナルな著述においても規範的なものと見做されるようになったことから、ロシアの文章語の発達において、新しい傾向の源泉に位置することとなり、カラムジンら新文体派（новаторы）に影響を及ぼしたばかりか、それ以上にシニコフら古文体派（архаисты）にも影響を与えることとなった。

逆説的なことに、教会スラブ語起源の翻訳語は、〈ロシア語－教会スラブ語〉という対立軸において、教会スラブ語でないものはすべてロシア語に属することになったため、自動的に、ロシア語的なものとして意識されることになった。西欧語からの借用表現が一定の貴族層において話し言葉（разговорная речь）で用いられたこともあって、ロシア語的なもの

31 ロモノーソフの唱えた「三文体説」は、この状況を踏まえた上で、ジャンルによる文体の使い分けという形で、下位におかれた文体を文章語として認知し、根拠づけたものである。

のは、「話し言葉的なもの (разговорное)」と考えられるようになる。このようにして、外国語の影響下に導入された新しい言語的な要素は、教会スラブ語とは別個の存在としてのロシア文章語を特徴づけることとなった。

この状況において、「教会スラブ語的 (церковнославянское) なもの」と「ロシア語的 (русское) なもの」は、「自分の (свое=本来的なисконное) もの」と「他者的な (чужое=借用されたзаимствованное) もの」、「民族的なもの (национальное)」と「国際的なもの (интернациональное)」という対比の中におかれることになる。このため、教会スラブ語側の立場から、外国語の影響に反対する闘争が行われることになった。この結果、18世紀後半から19世紀初頭にかけて、教会スラブ語的要素の役割は大きくなったが、これに際して教会スラブ語的文体は、本来の教会スラブ語の伝統の視点からでなく、ロシアの話し言葉の視点から見られるようになった。

ロシア語は教会スラブ語から、とりわけその高雅な文体から生まれたという観念は、意識において、教会スラブ語風 (церковнославянизм) と、古風ロシア語風 (архаический русизм) を一体化させてしまった。そして、18世紀半ばにはロシアの「古来からのもの (коренное)」探しが流行することになった。

こうした志向は、西欧語的要素を、スラブ語的な表現に置き換えることの奨励として現れる。また、こうして「古来からのもの」が奨励される状況において、ロシア語使用者は、それを何かはっきりした判断基準に基づいて行うのではなく、語感 (вкус) によって判断することとなった。

上述のように、ロシア語が人工的に古風化されたことによって、以前にはあり得なかったことだが、古風なロシア語の語彙が、もともとの教会スラブ語においては中性的であったのに、特別の詩的ニュアンスを帯びることとなった。ロシア語とのペアで例を示すならば、たとえばшлем-шелом, плен-полон, собирать-сбирать等がそれである。教会スラブ語は、言語意識の上で独特のフォークロアの言語に近づき、民族文化や国民文化の面で捉えられるようになった。こうして生まれたロシアのフォークロアや神話に対する関心は、次第にスラブ民衆文化全体にその対象を広げるようになった。そして、教会スラブ語のことを意味したславенскийという形容詞は、民族的・文化的なものを意味するようになった。

以上のようにして、教会スラブ語的要素 (церковнославянская стихия) の使用圏が拡大した結果、それは直接教会と結びつくのではなく、国民文化 (национальная культура) や文化的伝統一般と結び付けられるようになったのである。

このようにして、18世紀か後半から19世紀初頭にかけて、ロシア文章語の中心的対立項は、〈教会スラブ語的なもの (церковнославянское) —ロシア語的なもの (русское)〉から、〈ロシア的なもの (русское) —ヨーロッパ的なもの (европейское)〉に移行したのである。後者は、あるいは〈国民的なもの (национальное) —外国的なもの (иностранное)〉、〈原始的なもの (первобытное=無学なもの невежественное) —文明的なもの (цивилизационное=文化的なもの культурное)〉³²⁾さらには、〈スラブ的なもの (славянское) —フ

32 *Лотман, Успенский, Споры о языке в начале XIX. С. 498.* 原文では括弧内の語句の順が〈文明的なもの (文化的なもの) —原始的なもの (無学なもの)〉となっているが論旨を考慮して入れ替えた。

ランス的なもの (французское) と見ることもできる。

18世紀末から19世紀初頭において、カラムジンに代表される「新文体派」とシシコフが代表する「古文体派」が論争したのは、こうした背景の上においてであった。

この論争は、フランス語からの借用語の可否という形で行われたが、この段階においては、西欧語から取り入れられた要素をロシア語から全く排除するようなことは、誰にとっても考えられないことになっていた。また、逆に、「新文体派」にとっても、教会スラブ語的な要素を排除できるものではなかった。そういうわけで、両陣営の立場は、どちらも不徹底にならざるを得なかったのだが、対立は残り続けた。両陣営は、お互いの存在を自己の存在理由とするようになり、借用語の浸透、ロシア的要素とヨーロッパ的要素の結合、および教会スラブ語的要素とロシア国民的要素の結合・文体の一体化が進行した⁽³³⁾。

18世紀-19世紀初頭の言語論争は、書き言葉を原則にする立場と、話し言葉を原則にする立場との争いでもあった。シシコフは、自分の考える教会スラブ語から出発して考えようとしたが、カラムジン派は全体的に、話し言葉的な方向を志向した。「話すように書くべき (писать как говорят)」⁽³⁴⁾というカラムジンのことばがある。

カラムジン派は、文章語と話し言葉を近づけようとしたが、シシコフ派はそれを国民的伝統からの逸脱と見た。シシコフ派は、教養社会の言葉 (язык общества) は文章語と何の関係もない、と考えていた。

ロシアの話し言葉を記録する試みは、1730年代になされたのが初めだが、これは、西欧の影響を受けて、西欧語と同じ型の言語を造り、ロシアに西欧の言語状況を移植しようという考えからなされたことだった。

カラムジンの立場は、話し言葉への西欧語の流入と結びつくこととなった。

18世紀の後半においては、話し言葉に外来語を交えることは、書き言葉に教会スラブ語的言葉を交えるのと同様、文体を高雅に見せる働きがあった。18世紀末の教養社会の話し言葉においては、「話すように書くべき」という標語に表わされるように、意識的に外来語を文章語の文体範囲 (стилистический диапазон) に含めるようになった。文章語と、首都の貴族層の話し言葉との関係は明瞭になった。

話し言葉は文章語の体系の外にあったのだが、18世紀末になって、文章語の内部に、書き言葉 (книжный язык) と話し言葉 (разговорный язык) との対立が現れた。このことを理解するには、カラムジン派は、話し言葉と文章語を直接結び付けずに、書物、すなわち文章 (литература) を媒介にして考えていたことを知る必要がある。カラムジンは、次のように書いている「フランス語はすべてが本の中にある ... しかしロシア語は一部にとどまる。フランス人たちは、話すように書いている。しかし、ロシア人は、多くの事柄について、才能ある人が書くように話さなくてはならない。」

教会スラブ語とロシア語が文体使い分けの状態にあり、書き言葉イコール教会スラブ語であった時代には、文章語に取り入れてよいかどうかの基準は、その材料が、その当時の視点で、文章的 (литературный) 作品に属すかどうかであった。18世紀末以後、状況は大きく

33 Лотман, Успенский. Споры о языке в начале XIX. С. 475-505.

34 この表現は、「Отчего в России мало авторских талантов?」という1802年に「Вестник Европы」誌上に発表された論文に用いられた。

変化した。「文章 (литература)」の概念は、「文章語」、すなわち文学作品に用いられる、それによって書くだけでなく話さなくてはならない言語ということが第一義となったのである。

これによって、言語をめぐる論争は、文体をめぐる論争に転化した。このことはカラムジン派とその反対派を結び付けたが、それは文章語の運命が新しい段階に入ったことを明確に示すものである。

従来 литература という言葉は、書かれたもの (письменность) 一般をあらわしていたが、今や文学作品 (belles lettres) のことを意味するようになり、科学 (наука) と対をなす言葉となった。また文語 (книжный язык) は、かつて文章語 (литературный язык) と完全に同義であったのが、より狭義の、話し言葉 (разговорная речь) に含めることのできないものを意味するようになった。カラムジン派の人々は、この意味での文語 (книжный язык) を教会スラブ語風 (славянизмы) と同一視し、それと闘争したのだった。こうして、教会スラブ語的要素とロシア語的要素の対立は、文語と話し言葉の対立へと転化した。新文体 (новый слог) が依拠する言葉は、話し言葉一般ではなく、世俗教養社会、すなわち貴族エリートの話し言葉であった⁽³⁵⁾。

実は、ロシアにおいて社会層による話し言葉の差が生じたのは、ディグロシアが解消されたことによる。それによって、社会層にかかわらず共通していた言語規範が失われ、貴族の言語とそれ以外の社会層の言語との隔たりが生じた。西欧語風 (европеизмы) は、その最も明瞭な障壁をなした。言語の教会スラブ語化 (славянизация) は、西欧からの影響に対する闘争と結びつくことから、文章語の民衆化 (демократизация) であると考えられた。デカプリストに連なるカテーニン、キュッヘルベルク、グリボエドフなどの作家たちがシシコフ派であるのは、こうした事情による。

カラムジンの文体は、若い頃はフランス語の語彙を散りばめたものだったが、次第に古文体派に接近した。カラムジン派とシシコフ派の対立を総合する形で解消し、ロシア語の文体を安定させたのは、プーシキンであった⁽³⁶⁾。

以上、かなり長文にわたる要約を試みたが、18世紀末から19世紀初頭にかけてのロシアにおいて、ロシア語がどのように立ち現れようとしていたかをここから読み取ることができるだろう。ロシア語は、書き言葉としての伝統のある教会スラブ語の造語力を活用しながら、西欧語の著作の翻訳に使用でき、話し言葉に基礎をおく文章語として確立に向かって歩んでいた。しかし、その基礎にある話し言葉は、民衆の言葉ではなく、首都の上流社会の言語だったのである。

3. 19世紀初頭における聖書ロシア語訳の意味

前節で紹介したロートマンとウスペンスキーの共著論文によれば、19世紀初頭のロシアにおいて、ロシア語は、上流階級の話しことばをもとに、まさに確立の途上にあっただけ

35 Лотман, Успенский. Споры о языке в начале XIX. С. 520-526.

36 Лотман, Успенский. Споры о языке в начале XIX. С. 529-538.

る。こうした状況においてシシコフは、ロシア語と教会スラブ語を別個の言語とする立場を取らず、文体の差として見做す立場を堅持していた。そのような立場から出発するならば、聖書や典礼には高雅な文体 (высокий слог) である教会スラブ語が用いられるべきであり、低俗な文体 (низкий слог) であるロシア語に聖書を訳すことは受入れ難いであろう。

一方、当時の言語の通用状況を考えた場合、ロシア語は、上流階級や知識人にはなるほど近しくなりつつあったであろうが、民衆レベルにおいて通用したかということ、疑問が大きい。そのため、ロシア聖書協会が活動した19世紀初頭の時点においては、聖書のロシア語訳事業は、民衆に聖書を普及させるという目的に対しては、適切でなかったように思えるのである。むしろ、これは、知識人にとっての問題と考えた方がよいだろう。すなわち、教会スラブ語は、これを西欧語と同等の資格のある文明語とすることは無理である。そこで、当時形成の途上にあったロシア語であるが、これを教会スラブ語とは完全に独立した文明的言語として育てたい。そしてフランス人がフランス語訳の聖書を手にし、ドイツ人がドイツ語訳聖書を手に取り、聖書がそれぞれの国民の文化的財産となっているように、ロシア人にとってロシア語で読める聖書がほしい、さらにはロシア語の普及によって社会を変革したいという、知識人にとっての革新運動の一種だったと見るのが実態に近いのではなかろうか。しかし、この試みは一旦中断を余儀なくされたわけである。

では、19世紀のロシア社会において、ロシア語はいかなるポジションにあったのであろうか。その点に関しては、A.Г. クラヴェツキーとA.A. プレトニョーヴァが、その共著『ロシアにおける教会スラブ語の歴史：19世紀末—20世紀』の冒頭において、次のように指摘しているのに注目したい。

「18世紀に生まれた新しい文章語の通用範囲は、20世紀の20年代に至るまで限定的であった。ロシア文章語の駆使能力は、社会の教養層の外には出なかった。これに際して、国家の政策は、ロシア文章語の使用範囲を広げる方向を向いていた。... (中略) ... 20世紀初頭に至るまで、子どもの読み書き教育は、ロシア語から始められるよりも、教会スラブ語から始められる方が多かった。」³⁷⁾

さらに、クラヴェツキーとプレトニョーヴァは、ロシア社会においてこの言語の違いが、〈エリート文化 (элитарная культура) — 民衆文化 (народная культура)〉、さらには〈啓蒙 (просвещение) — 無学 (невежество)〉という価値軸と結びついていたと述べる³⁸⁾。

前節においてわれわれは、18世紀から19世紀初頭にかけてのロシア語の形成が、西欧的なものを単に移植するという、一直線のものではなかったことを見た。教会スラブ語の遺産を活用しながら、それとは別個な言語として、曲折を経ながらそれは確立されていったのだった。その成立事情から、19世紀において、ロシア語は、西欧諸語に対しては〈文明的なもの (文化的なもの) — 原始的なもの (無学なもの)〉の価値軸において、後者の側に立たされた。しかしその一方、ロシアの内において、教会スラブ語との関係では、〈啓蒙 — 無学〉の価値軸の前者に位置するという、一種の二重構造が存在したと考えられる。しかし、この価値軸において無学の極に位置づけられる教会スラブ語とロシア正教会は、ロシア国家

37 Кравецкий А.Г., Плетнева А.А. История церковнославянского языка в России, конец XIX - XX в. Москва: Языки русской культуры, 2001. С. 25-26.

38 Кравецкий, Плетнева. История церковнославянского языка. С. 34.

統合の核として、欠くことのできない存在でもあった。ここに19世紀ロシアが直面した困難がある。

初等教育においては、教会スラブ語が「読書百遍」的な伝統的な方法で教授され、中等・高等教育においては、ロシア語が、近代言語として体系的に教授されるという状況⁽³⁹⁾は、19世紀を通じて上述の二重構造を再生産し続けたであろう。

松里公孝は、2002年のロシア史研究会の大会において、「同化能力のないロシア」というテーゼを唱えたが、その理由の一端はここから浮かび上がってくるように思われる。

すなわち、フランス、ドイツ等の西欧文明に直接接することのできるロシア帝国内諸民族にとって、ロシア文化を受入れることは、文明に近づくのではなく、却って遠ざかるもののように観念された⁽⁴⁰⁾。その上さらに、教会スラブ語によるロシア正教を受容し、教会スラブ語を教授する学校に子女を通わせるというのは、その文化的構図からして、思いもよらないことだったであろう。

そうした観点からするなら、ロシア正教会において聖書や典礼テキスト等のロシア語化を進めることは、上記の構図を打破して国民統合を進めるために重要な課題であったと思われるが、同時にそれを妨げる大きな理由が2つ存在したように思われる。

一つは、教会スラブ語は、東スラブ世界の共通の文化的拠り所であったため、ロシア語への移行は、その一体性を傷つける恐れがあったことである。話し言葉とは別個に構築されていた教会スラブ語とは異なり、話し言葉に依拠するロシア語を採用することは、オーストリア＝ハンガリー帝国領など周辺領域にも広がる、東スラブ世界の文章語の統一を破り、国外に居住する東スラブ民族との結びつきを弱めるだけでなく、教会スラブ語とロシア語以外の第3の言語の成立を導く可能性があった。しかし、教会スラブ語に固執することは、ロシアを文明化するという課題と両立し得ない。これは深刻なジレンマである。

実際、第3の言語成立の懸念は、ウクライナ語の形成によって現実のものとなった。

第2は、ロシア人たちの抱いていた価値観の問題である。

前に紹介したロートマンとウスペンスキーの論文によれば、19世紀初めにおいてもロシアには終末論的世界観が深く根をおろしていた。言語論争の参加者たちも、その属する陣営の区別なく、そうした世界観を共有していた⁽⁴¹⁾。

こうした考え方においては、歴史は、古い時代に優れたものがあって、それが損なわれていく過程と考えられることになる。

39 *Кравецкий, Плетнева*. История церковнославянского языка. гл. 1.

40 例えば、ポーランド人は、ポーランド語をロシア語より文明的な言語と考えていたであろう。おそらくそれには相応の理由があるのであって、たとえば、*Виноградов В.В.* Очерки по истории русского литературного языка XVII-XIX вв. [Изд. 2-ое.] Лейден: Е.И. Брилл, 1949 においては、特に17世紀において、多くの語彙がポーランド語を介してロシア語にもたらされるなど、ロシア語がポーランドの多大な影響を受けていたことが記述されている。ついでながら、この本においては、ロシア文章語がポーランド以外にも外国文化の多大な影響を受けて発展したことが叙述されている。しかし、1979年にソ連邦で刊行されたロシア語百科事典 *Филин Ф.П.* (гл. редактор) Русский язык: энциклопедия. Москва: Советская энциклопедия, 1979 の *Истрия русского литературного языка* の項目を見ると、上記の *Виноградов* の著作は、レーニン全集に次いで2番目に挙げられているにもかかわらず、文章語史の発展における外国からの影響には一切触れず、あたかもロシア文章語が、その内在的エネルギーによってのみ発展したかのように記述されている。

41 *Лотман, Успенский*. Споры о языке в начале XIX. С. 453-462.

言語の問題で言えば、これは、古くから行われている教会スラブ語によって書かれたもの、教会スラブ語によって執り行われるものには大きな価値があるが、西欧文明の影響下に新しく造られたロシア語によるものは価値が低い、ありがたみが薄いという感覚に通じるであろう。

西欧においては、印刷・出版文化の普及がこうした終末論的世界観を徐々に隅に追いやり、新奇なものにより大きな意義を認める方向に向かったとされる。しかし、印刷・出版文化が西欧より遅れて普及したロシアにおいては、その転換点がより遅く訪れ、教会スラブ語的なものから離れることを難しくしたものと思われる⁽⁴²⁾。

アレクサンドル一世時代の、ロシア語訳聖書を普及させる試みは、結局、一部の貴族・知識人のための運動にとどまり、上に述べたように10年余で中断することとなった。その後、アレクサンドル二世の指示により再び着手された聖書のロシア語訳作業は、1876年に宗務院版聖書として完成を見、正教会が公式に認めるロシア語訳聖書として通用するようになったが、教会スラブ語的な要素をなるべく多く残そうとした、伝統に強く配慮したものといわれている⁽⁴³⁾。

ロシア正教会における典礼言語は、その後も教会スラブ語であり続ける。しかし、ロシア語が徐々に普及していくにつれ、信徒が理解できないという問題は大きくなっていったであろう。

1917-1918年に行われたロシア正教会の全体的な会議である地方公会は、この問題を審議するために1部会を編成して取り組んだが、全体的な解決には至らなかった。そして、この問題は、教会内において現在でも未解決の問題として意識され続けているのである⁽⁴⁴⁾。

42 E.L. アイゼンsteinは、印刷術の普及が、学問のありかたを、筆写時代の「失われた知識の探求」から新しい知識の追求へと徐々に転回させる契機となったことを指摘する。つまり、印刷文化が早くに展開した西欧においては、こうした終末論的世界観は、まだしばらく命脈を保つとはいえ、影響力は確実に縮小していったということであろう。E.L. アイゼンstein著、別宮貞徳監訳『印刷革命』みすず書房、1987年、94-95頁。

43 Рижский. История переводов библии в России. С.163.

44 その後の典礼言語問題については次を参照。Кравецкий, Плетнева. История церковнославянского языка; Балашов Н. Язык богослужения: из истории церковных дискуссий в России // Континент. 1998. №98. С. 247-279.